臨 牀 叢 談

上顎竇根治手術ニ於ケル「ゴム」管ノ應用(新考案)

Prof. Dr. K. Komuro u. Dr. K. Hashimoto: Über Anwendung des Gummirohrs bei der Radikaloperation der Kieferhöhlenentzündung.

長崎醫科大學耳鼻咽喉科教室

小 室 橋 本 勝 文 要

上顎竇根治手術ノ終リニ、竇内ニ「タンボン」ヲ挿入スル事ノ可否ニ就テハ種々論議サレテ居マスガ、此處ニ之ニ關シテ詳細ナル批判ヲ爲ス事ハ避ケマスガ、無「タンボン」ヲ主張スル主ナル點ハ「タンボン」ヲ取出ス時ニ可成ノ疼痛ヲ患者ニ與フル事ト、出血ガ可成多イ事等ヲ舉ゲテ反對シテ居ル様デアリマスガ、私共ハ矢張り後出血ノ血液凝固ヲ促進スル爲メト、多量ノ血液凝塊物ノ竇内閉鎖ヲ防グ爲メト、或ハ肉芽形成ヲ促進スル爲メ、等ノ理由ニヨリテ竇内ニ輕ク「タンボン」ヲ挿入スルノ却ツテ利益ナル事ヲ思考シ、此ヲ常用シテ居マスガ、偕テ此「タンボン」ヲ取り出スニ當リテハ反對論者ノ言ノ如ク、患者ハ相當ノ疼痛ヲ訴ヘ、中ニハ手術時ヨリモ「タンボン」ヲ取ル時ガ却ツテ疼痛甚シク可成ノ苦痛ヲ訴フル事アルト共ニ、時ニハ可成ノ出血ヲ見ル事ガ屢々アルハ諸子ノ已ニ經驗セラレテ居ル通りデアリマス。爲メニ何等カノ方法ヲ以テ此等ノ不快ナル症狀ヲ除去シ得バ患者ノ幸福之ニ過ギザル者ナキトノ勸議カラ、此處ニ私共ハ「ゴム」管應用ヲ考案シタ次第デアリマス。

方 法

一、「ゴム」管ノ太サ及ビ長サ

「ゴム」管ハ餘リ硬ク無イモノデ、太サハ鼻腔側壁ノ對孔ヲ容易ニ通過シ得テ、出來ル丈ケ小ナル者デ、且ツ「タンボン」ガ容易ニ通過シ得ル者(直徑約一糎)長サハ鼻孔前緣ヨリ竇内ニ達スルダケ(約六糎)デ充分デアル。

二、「タンボン」、「ガーゼ」ノ巾ハ「ゴム」管ヲ容易ニ通過シ、長サハ竇内ニ輕ク存在スルダケ(約二十五糎ヨリ五十糎)デアル。

偕テ手術ノ終リニ竇内ヲ充分清拭シ止血ヲ完全ニナシタ後、前記ノ「タンボン」ニ〇・五%—一・〇%ノ「トリパフラビン」溶液ヲ充分ニ浸潤セシメ、是ヲ前記ノ「ゴム」管内ニ挿入シ夫ヨリ「ゴム」管ヲ彎曲「ピンセット」ニテ挟ミ、鼻腔ヨリ側壁對孔ヲ通ジテ竇内ニ挿入シ「ガーゼ」ノ

一端ヲツカミ、引キ出シナガラ竇内ニ輕ク「タンボン」ヲ爲シ、他端ヲ僅カニ「ゴム」管ノ端ニ遊離セシム、コレ他旦「タンボン」摘出ニ使用スル爲メ也、コノ際對孔部下縁ノ粘膜辨ノ翻轉セザル様且ツ「ゴム」管ニテ輕ク該辨ヲ壓スル様ニナス。コノ際「ゴム」管ノ出入容易ナルヤヲ檢ス可シ。此「ゴム」管挿入ニハ反對ニ竇内ニ入レテ後、鼻孔ニ出シテモ同様デアリマス。終リニ「ゴム」管ノ竇内ニ陥入スル事ヲ防グ爲メニ鼻孔ノ處デ安全「ピン」ニテ止メ、後手術粘膜傷ヲ骨膜ト共ニ縫合シテ手術ヲ終ル。

「タンボン」除去法。

一定時日ノ後「タンボン」ヲ取り出スニ當リテハ先ヅ「ゴム」管ヲ固定シテ、「ピンセット」ニテ「ガーゼ」ノ一端ヲ挟ミ注意シナガラ徐々ニ是ヲ除去シタル後ニ「ゴム」管ヲ除去スルナリ。

實驗例及其成績。

昭和二年六月廿八日ニ初メテ此方法ヲ施行シテ以來、實驗例八十一例ニ就イテ其ノ成績ヲ申シ上ゲマスト、「タンボン」除去ニ際シテハ殆ンド全ク無痛デ且ツ容易ニ取り出ス事ガ出來マシタ。是ハ「ゴム」管應用ヲ施サザル反對側ト比較シテ見マスト、患者ハ無痛ナル爲メニ非常ニ喜ブコトニヨリマシテ證明スル事ガ出來マス。又出血モ是ヲ施サザルモノニ比スルニ非常ニ少ナイノデアリマス。此等ハ容易ニ理解セラ、點デ即チ「タンボン」除去ニ際シテ主ナル疼痛部位ハ側壁對孔縁ヲ「ガーゼ」ニテ摩擦スル爲メニ惹起セラ、モノデ、且ツ出血モ勿論竇壁ノ血塊除去ニヨリ來ルガ其他ハ同様ニ説明セラレト思ヒマス。然ルニ「ゴム」管挿入ニヨリ是ヲ完全ニ防禦出來ル爲メデアル事ハ勿論デアリマス。且ツ「ガーゼ」除去ニ際シテ往々粘膜辨ノ翻轉スルコトガ有リマスガ、之レモ完全ニ防止スルコトガ出來ルト共ニ該辨ノ固定モ同時ニ完全トナル理デアリマス。

此處ニ注意ス可キハ「ゴム」管ガ餘リ大ナル時或ハ餘リ硬イ時ハ下甲介ノ前縁或ハ粘膜辨ノ壓迫壞疽ニ陥ルコトハ明カデアリマスカラ此點ヲ充分考慮スル必要アルコトハ勿論デアリマス。下甲介ガ非常ニ肥厚シテ居ル時ハ先ヅ切除術ヲ施行シテ挿入スベキデアリマス。是ハ早晚切除スル必要アレバ前以テスルモ是レハ問題デハアリマセン。又上顎竇ガ非常ニ小ナル時ハ困難デアリマスガ是レハ又「ゴム」管ヲ挿入スル必要モアリマセン。

結論

以上述べマシタコトカラ次ノ結論ヲ得ルト思ヒマス。

- 一、上顎竇根治手術ノ終リニ「ゴム」管挿入ニヨリ「タンボン」除去ニ際シテ殆ンド無痛ナル事。
- 二、該法ニヨリテ「タンボン」除去ニ際シ出血ヲ僅カニシ又殆ンド出血セザル事。
- 三、粘膜辨ノ固定ヲ完全ニシ「タンボン」除去ニ際シ該辨ノ翻轉ヲ完全ニ防禦シ得。
- 四、斯クノ如クシテ初メテ「タンボン」ノ意義ヲ充分ナラシムル事ヲ得ンカ。

附記、該方法ハ乳嚢突起炎手術後ニ應用シ好果ヲ得ツアリ。(昭和三年三月脱稿)